

研究課題名	肝細胞癌肝内再発に対して複数回施行した体幹部定位放射線治療に関する多施設共同後ろ向き観察研究
研究責任者名	広島大学大学院医歯薬保健学研究科放射線腫瘍学 教授 永田 靖
研究期間	平成 29 年 8 月(倫理委員会承認後) ~ 平成 31 年 3 月
対象者	平成 19 年 (2007 年) 1 月 1 日から平成 29 年 (2017 年) 6 月 30 日の間に、広島大学病院放射線治療科で定位放射線治療を受けられた患者さん。
意義・目的	<p>肝細胞癌に対する治療としては、肝切除、局所療法（主に局所焼灼療法；RFA）、肝動脈化学塞栓療法（TACE）、化学療法、あるいは肝移植などが施行され、国内外の治療ガイドラインでは、肝切除およびRFAは限局した病変に対する根治療法とみなされています。肝切除や局所焼灼療法が困難な肝細胞癌に対しては、肝動脈化学塞栓術が行われますが、近年、体幹部定放射線治療（SBRT）や粒子線治療が局所療法の一つとして注目されています。このうちSBRTは肝細胞癌に対して保険適応となっており、標準治療である手術及びRFAが困難なHCCに対して、2-3年局所制御率90%程度と良好な治療成績が報告されています。しかし、肝細胞癌はB,C型肝炎などをベースとした肝硬変を母地として肝内再発を来しやすい特徴があり、全国集計では診断から2年以内に肝細胞癌の28.8%に肝内再発が生じており、再発全体の約87%を占めています。このような状況において、もともと切除やRFAが困難な場合にSBRTを行った患者さんの中でも、肝内再発を来し再度SBRTを行う機会にしばしば遭遇します。このような場合、粒子線治療はブラッグピークという患部に集中的に線量を付与するX線にはない物理学的特性を活かして、複数回の照射において、正常肝組織を守ることが可能であり、優れた方法です。しかし、平成29年現在、肝細胞癌に対する粒子線治療は保険収載されておらず、実施可能な地域も限られます。粒子線治療が行えない場合、SBRTはその線量集中性及び位置精度といった利点を生かして用いられますが、HCC肝内再発に対して複数回SBRTを行った報告は、現時点で1つのみで、この報告も症例数が少なく、その有用性と安全性については明確にされていません。従って、HCC肝内再発を来し、複数回施行したSBRTの有効性と安全性を明らかにすることは、世界的にも未解決の問題であり、より多くの患者さんに治療法の選択肢の拡大及び医療経済的な恩恵をもたらす意味で有用と考えますので、本研究を企画しました。</p>
方法	<p>本研究は、診療録（カルテ）情報を調査して行います。 カルテから使用する内容は診断名、年齢、性別、病歴、有害事象、予後情報です。 新たな質問や検査はありません。（個人を特定可能な情報は解析に用いません）</p>
共同研究機関	<p>大船中央病院 広島がん高精度放射線治療センター 広島大学に情報を集め解析します。</p>

試料・情報の管理責任者

広島大学病院 放射線治療科 教授 永田 靖

個人情報の保護について

お名前、その他の個人情報が表に出ることは、一切ありません。

利用する情報からは、氏名、その他の個人を直接同定できる情報は削除します。山梨大学医学部附属病院にデータを集約しますが、個人情報を全て除いたデータのみを提供します。研究成果は、解析した全体の数字として学会や学術雑誌で発表されますが、その際に個人名などが表に出ることは絶対にありません。

この研究にご自分のデータを使ってほしくない方、またはそのご家族は、2019年3月31日までにお申し出ください。この調査へのご自分のデータの使用をお断りになっても、不利益を受けることは全くありません。

問合せ・苦情等の窓口

〒734-8551 広島市南区霞 1-2-3

T e l : 082-257-1545

広島大学病院放射線治療科 講師 木村 智樹

研究機関：広島大学